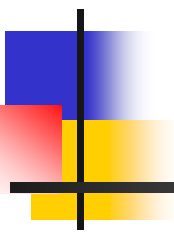


大量のインプットと少量のアウトプットの重要性



ピッツバーグ大学言語学科
(国立国語研究所・上智大学)
白井恭弘 (Yasuhiro Shirai)

yshirai@pitt.edu

2012.12.8 英語教育フォーラム
(宮城教育大学)



言語ができるとはどういうことか (communicative competence)

- 文法能力 (linguistic competence)
 - 音声・単語・文法的能力
- 談話能力 (discourse competence)
 - 一文以上をつなげる能力
- 社会言語学的能力 (sociolinguistic competence)
 - 社会的に「適切」な言語を使う能力
- 戦略的能力 (strategic competence)
 - 問題が起こった時処理する力



単語と文法だけではだめ

- 言語には規則で割り切れる部分と、記憶に頼るべき部分がある
- 規則がどこまで適用できるかはわかっていない部分が多い
- よって、単語を覚えて文法規則にあてはめるだけでは不自然な表現になる

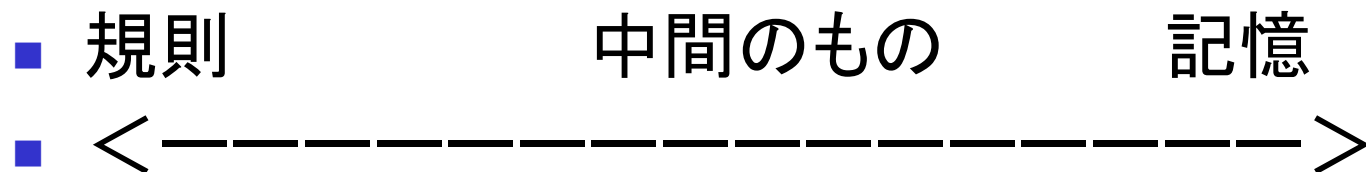


どれが自然な表現？

- I wish to be wedded to you.
- I want marriage with you.
- I want to marry you.
- My becoming your husband is what I want.
- I desire you to become married to me.

規則と記憶を両方意識して学習

- 文法規則だけですべて割り切れないことをまず自覚する(言語はそんなに論理的なものではない)



Hold your horses! ?He held his horses.

He spilled the beans. ?The beans were spilt.



ではどうしたら言語能力がみに つくか：言語習得の本質とは

- インプット仮説

- インプットを理解することにより言語習得は起こる

- 自動化理論

- 明示的知識を徐々に自動化していくことにより、言語習得は起こる



インプット仮説

- インプットにより言語習得はおこる
- アウトプットは必要なし
- 明示的学習は、発話の正しさをチェックする能力のみに寄与する



インプット仮説の証拠

- 沈黙期: ずっと黙っていたのに、突然話しだす子供たち
- Comprehension approach の効果
 - TPR (Total Physical Response)
 - イメージョン教育



ほんとうにインプットだけで習得できるのか？

- TVだけみてたら習得できない
- 聞いてわかるけど話せない受容バイリンガルの存在
---> 聞いているだけではだめ
- インプット＋アウトプットの必要性が習得のカギ：
実際に話さなくても頭のなかで(無)意識的にアウトプットする(リハーサルする)ようになる



なぜインプットで習得できるのか

- 予測文法が身につく

- 昨日、NYから成田までANAで_____

- I gave him _____

次に何がくるかは、母語話者は瞬時に、無意識的に予測している

この知識は文を大量に処理することにより身につく



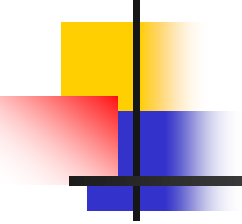
自動化理論

- 最初に明示的知識をみにつけ、練習することにより、自動的に使えるようにする
- [宣言的知識]--自動化-->[手続き的知識]



自動化理論の限界

- 複雑な言語ルールをすべて明示的知識として習得するのは無理
- 自動化そのものに限界がある
 - 3単現の-s:頭でわかっているけど使えない

- 
-
- インput理論:L1、L2ともに
 - 自動化理論:主としてL2

 - 外国語学習においては、両者を最大限に利用すべき



メカニズム：まとめ

- (1) 言語習得は、かなりの部分がメッセージを理解することによっておこる
- (2) 意識的な学習は、
 - a. 発話の正しさをチェックするのに有効。
 - b. 自動化により実際に使える能力にも貢献
 - c. 聞いているだけでは気づかないことを気づかせ(1)の自然な習得を促進する(noticing)。



SLA研究者のあいだで

- インプットが言語習得の必要条件であることに異論はない (Swain 1985)
- アウトプットの役割に関しては、議論がある
- ー>インプットなしでは言語習得は起こらない



現在の論争点

- Input processing (e.g. VanPatten 2004)
 - Grammar change はインプットによっておこる

Output Hypothesis (e.g. Swain 2005)

- Input だけでは、十分な習得はおこらない



Input 仮説の落とし穴

- インputをcomprehensibleにするには、言語外の情報、知識などを使えばいい (Krashen)
- Input 理解は、文法処理をしなくてもできてしまうことが多い
(VanPatten, Swain)



たとえば、

a) Yesterday John walked three miles.

-> 文法処理不要

b) Today John walked three miles.

-> 文法処理必要



たとえば、

a) Yesterday John walked three miles.

-> 文法処理不要

b) Today John walked three miles.

-> 文法処理必要



学習者はsemantic processing で止ま
ってしまう傾向あり、だから

- Syntactic processing をさせるためには

- 1) output させる (Swain)

- 2) 文法処理が必要なinput 処理をさせる
(VanPatten)



Output の効用 (Swain)

- 1) 自分の英語のgap に気づく
- 2) 相手の反応により自分の英語が正しいか、
仮説検証
- 3) 学習者自信の言語について話す
(metalinguistic function)

→ (1) が最も重要ではないか？

cf. Gass & Alvarez-Torres (2005)



Output の効用

- 自動化になる (Ellis, VanPatten)

- しかし、これまでの研究で、アウトプットそのものが言語習得につながったという結果はあまりでていない (Shehadeh 2002)



Input + output の必要性が重要

- ずっと黙っていて突然話し始める子供
→ アウトプットそのものは言語習得には必要ではない

しかし、インプットだけでは習得できない

(a) TVを見ているだけでは言語習得はできない(Sachs et al. 1981)

(b) 受容的バイリンガルのケース



Input + output の必要性が重要

- Input だけでは習得できないのは、アウトプットの必要性がないから
- 突然話し始める子供は頭の中で(無)意識的リハーサルをしているはず
- 重要なのはインプット+アウトプットそのものでなく、アウトプットの必要性(必要性があれば、リハーサルをする)



Input + output の必要性が重要

- Interaction --> input の順が、input->interaction の順より効果的(Gass & Alvalez Torres, 2005)
- Output することにより、input の必要性が高まりinput による習得がすすむ



結論：大量のインプットと少量のアウトプットを

- Input とoutput を組み合わせる
- Input を増やす(output そのものはそれほど必要なし)
- 同じ(もしくは関連)教材を使ってInput --> output --> Input
- Input は理解できるものを
 - -分野をしぼったインプット
 - - 同じ教材でListening->reading
- Output は、意味を考えてメッセージを構築するように



Input -> output 活動

- Input をしたら、どんなに簡単でもよいから、output させる。そのことを前もって知らせておくことが重要
- たとえば、Ichiro に関する記事を読ませたら Ichiro _____ in 2001. などと書かせる
- 英文を読ませたり聞かせたりしたら、英語で短くでいいからなんらかの反応をさせる。



Input に基づいた小学校英語

- Total Physical Response の多用
- 教師の英語力に問題があれば、十分なトレーニングとマニュアル、補助教材で補う
- 韓国のように、誰でも使える教材を作ってしまう、教師も同時にact out する
- 自主的多読教育 (Lightbown, 1992) の応用
- 決まり文句、歌、ゲームだけでは言語能力は発達しない
- アウトプットはあたらしい言語材料はあたえてくれない。すでに自分のもっている言語知識を活性化させるだけ
- せっかく耳のよい時期に英語に触れるのだから、native の音に触れたほうがいい
- 注目：仙台明泉学園の教材 (Input を歌とTPRで)



具体例(高校英語)

■ インプットモデルの例

- Krashenのナチュラル・アプローチを応用
- 高校英語、文法の授業を廃止、宿題に
- サイドリーダーなどによる多読(多聴)
- L->R reading (T-F questions)
- 偏差値10上昇

インプット＝インターアクションモデル に基づいた実践例

(カーネギーメロン大学)

- ゼロからはじめて週4時間の授業を3ヶ月
⇒ 15分会話ができるようになる(期末試験)
- 初日から日本語を使ってコミュニケーション(白井です。
出身は東京です。どうぞよろしく)
- 文法説明は最小限。その日の文法項目を使ってクラス
メートにインタビュー、それを記録する。宿題でその内
容を文に書いて、翌日提出。(トピック:友人、クラス、出
身地)
- 言語材料はダイアローグの暗記による

インプット＝インターアクションモデル に基づいた実践例

(カーネギーメロン大学)

- 初級の段階から

(a) 身近な内容について

(b) 意味と形式の両方に注意を払って自然な
コミュニケーションをしていけば、

比較的短期間で、「限られた文法、単語を使って、限られた内容について」流暢なコミュニケーションができるようになる。あとは、文法項目、単語の知識を増やしていけばよい。

インプット＝インターアクションモデル の問題点

- 初級の段階からアウトプットを強要すると、へんな外国語（L1 + Monitor mode, Krashen 1981）になってしまう危険性
(e.g. *How do you think about it?*)
- Nativelike selection (Pawley & Syder 1983)
I wish to be wedded to you.
I disire you to become married to me.
(The home runs) made me have confidence.
- インプットでしか身に付かない知識もある
Open me a beer. Vs. Open me the door.



Structured input

(e.g. VanPatten)

母語にない文法カテゴリーを強制的に処理させるようなエクササイズ

(例) I ate chicken. vs. I ate a chicken.



注意すべき点

- インputをいかに効率よく習得にむすびつけるか
 - 内容語処理(もしくは映像処理)にとどまらないように
 - 注意(attention) のレベルをいかにあげるか
 - アウトputも意識させる(もしくは少しでもやらせる)



ポートフォリオ学習

- 学習者がどんな学習活動をしたか記録をとらせ、その証拠を提出させる
- 自分の動機づけにあった活動ができる
- インプットとアウトプットの量と質を高められる
- これを教師がサポートする(具体例を提示)
- メディア利用により可能性は無限大



ポートフォリオ学習（例）

- たとえば、テニスが好きで学習者は espn.com で、ビデオのニュースを見る、聞く、読む
- 分野をしばったインプットによる相乗効果
- さらに、BBSやchat, blog で書くoutput
- 可能ならばskype, google talk で話す練習

→すべて記録にとり提出



アウトプット & インターアクション

- CMC(computer-mediated communication) の果てしなき可能性

-asynchronous

E-mail, BBS, Blog, web-page

-synchronous

chat, teleconference, video-conference (skype, google talk, etc.)



おわりに

- インターネットの進化により、今までは不可能だった外国語学習活動が可能に
- 思いつき、経験主義でなく、SLAなどの科学的アプローチを日々実践する必要
- 大量の理解可能なインプットと少量のアウトプットを学習者に